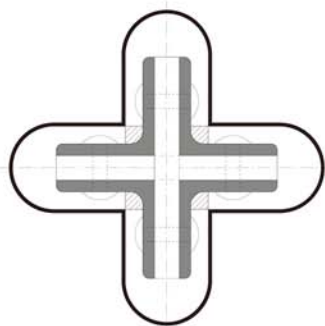


ディテールの建築思考

近代建築の思想を読む



後藤 武

彰
国
社

ディテールの建築思考

近代建築の思想を読む

*Thinking Details from
Modern Architecture.*

Takeshi Goto

後藤
武

彰
国
社

はじめに

後藤 武

建築の理論や思想は、宣言や哲学的なテキストの中にあると一般的には考えられています。たしかに建築家が建物に込めた意図や理想が、言葉のかたちで誰にでも伝達できるようにみえます。しかし饒舌すぎる建築家の言葉は、建物が語るものを越えてときに独り歩きし誇張や歪曲を含みます。建築家とは建物を設計する人のことなのだから、建築の思想は建物そのものに問いかけるのが最も理にかなっていると言えます。自然言語によって解釈される以前の建物が語る言葉に耳を澄ましてみることによって、私たちは豊かな建築の思想の鉱脈にたどり着くことができるのではないのでしょうか。

物質と物質とがぶつかり、その接合方法が試行錯誤される中で独自の判断が生まれ、一つ一つのディテールが生み出されます。そしてその集積が建物となるのです。一つの建物を形づくる思考は、ディテールに集約されているのです。建物

は言葉を話しませんが、その部分部分には濃密な無数の思考が埋め込まれています。ディテールという一般的なには技術的な納まりを指し、納め方の実践的な工夫が語られることが多いです。しかしここではそのような技術論にとどまらず、ディテールを局所的な小さな部位を指す概念として幅広くとらえてみたいと思います。

この本では、近代建築が建築の世界にもたらした変容を四つのカテゴリーに分類し、その変容を徴^しづける特徴的なディテールに着目して微細に読解することを通して、近代建築の思想を読み解くことを目指しています。その作業を通して、小さな部位に建築の思想が圧縮して封じ込められているさまが徐々に浮き彫りになってくるはずです。なぜ対象を近代建築に限定するのかと言えば、私自身が近代建築の起源をめぐる歴史研究を続けてきているからというのが大きな理由ですが、しかしそれ以上に近代建築が一つ一つのディテールに注ぎ込んできた思考の密度が歴史的に見て圧倒的だからでもあります。その思考を紡ぎ出すためには、ディテールから全体を推論していくプロセスが必要になってきます。

イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルクは、ある特殊な知の形式が一九世紀末

に顕在化したと言います。それは、残された痕跡などの徴候からその背後にある原因を読み解こうとする思考です。探偵や美術鑑定の現場で活躍したこうした思考に共通するのは、物質的な痕跡に着目し、細部から全体を構想する方法でした。細部にこそ、読解するべき謎が隠されているというわけです。徴候学を蘇らせながら、ここでは一九世紀末に誕生した近代建築のさまざまなディテールの中から、生々しい建築の物質思考を浮かび上がらせてみたいと思っています。

I 柱の発見

原始の小屋「オーダー」——オーギュスト・ペレ
自由のフォーマツト「ピロティ」——ル・コルビュジエ
反転する構築「十字柱」——ミース・ファン・デル・ローエ
森の結構「マッシュルーム・コラム」——フランク・ロイド・ライト

II インターフェースの変容

多様性の設計「装飾」——アドルフ・ロース
記憶の編集「コンクリート」——ル・コルビュジエ
不在の構築「目地」——ルイス・カーン
空間の彩色「ペイント」——ル・コルビュジエ
雨の設計「雨樋」——ル・コルビュジエ

III スケールの技法

シメトリーの迷宮「扉」——アドルフ・ロース
風景のモンタージュ「屋上庭園」——ル・コルビュジエ
時間の圧縮「水盤」——カルロ・スカルパ

IV 運動する身体

階段を降りる裸体「螺旋階段」——ル・コルビュジエ
触る建築「把手」——ル・コルビュジエ
四五度「刃掛け」——吉田五十八

I

柱
の
発
見

物

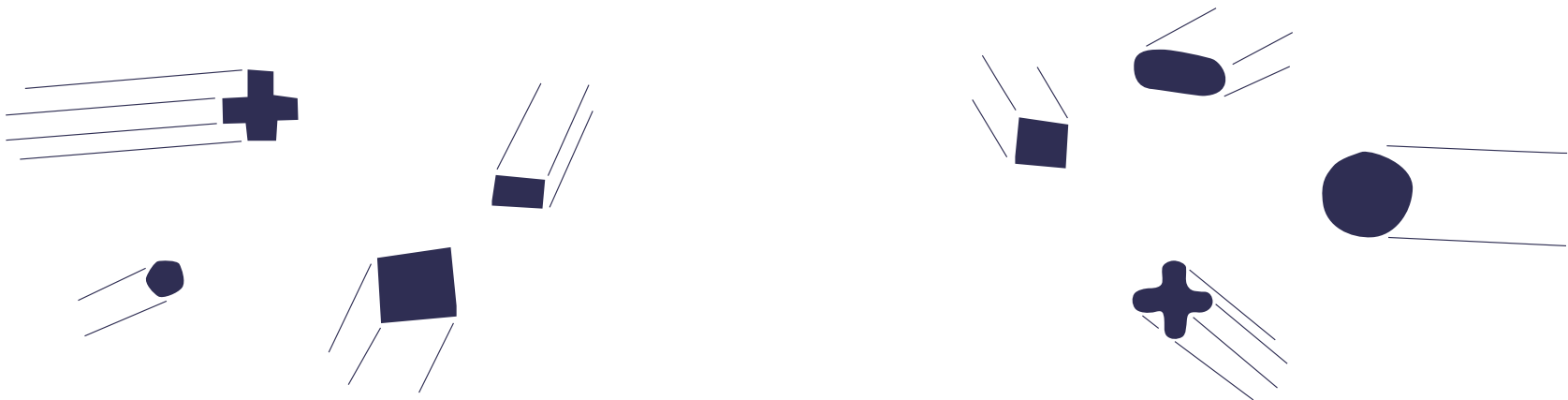
質と物質とがぶつかるところに建築が生まれ、その接合方法が思想になります。建築をつくり

出す材料の物性と組み立て方に応じて、おのずと接合の方法は変わってきます。ゴットフリート・ゼンパーという一九世紀末のドイツに生きた建築家、建築思想家が、建築の構築の仕組みを二つに分けています。石のような量塊を積み上げる連続的な行為によって構築していく方法をステレオトミック、細い線材を使って骨組みを組み立てていく方法をテクトニックと呼びます。

ギリシャ建築は組積造の建築です。しかしこのギリシャ建築が特殊なのは、石を積み重ねながら線材である柱をつくっていくところにあります。そこに接合部の困難が生じ、ディテールが発明されていきます。ジョイントのディテールとは、建築の構築方法の矛盾が露呈する場所であり、その矛盾と格闘してきた建築家たちの思考

の結実だと考えることができます。ミース・ファン・デル・ローエの鉄骨のジョイントは、現代的な課題を指し示していますが、それは同時にギリシャ建築の柱頭部への参照なしには語ることができません。ジョイントは、物質と物質とをつなぎながらも、建築における時間と空間を継いでいく存在なのです。

ミース・ファン・デル・ローエが壁の中から十字柱を独立させ、ル・コルビュジェがピロティを提唱する。鉄骨と鉄筋コンクリート技術の発展と相まって、二〇世紀初頭は柱という建築要素への関心が高まっていきます。初期近代建築家たちが柱に込めた意味は何だったのでしょうか。





前頁…ミース・ファン・デル・ローエ
「パルセロナ・パヴィリオン」(一九二九年)
壁から柱を分離させた構成で、柱断面は
十字形になっている

上…ル・コルビュジエ

「サヴォワ邸」(一九三一年)

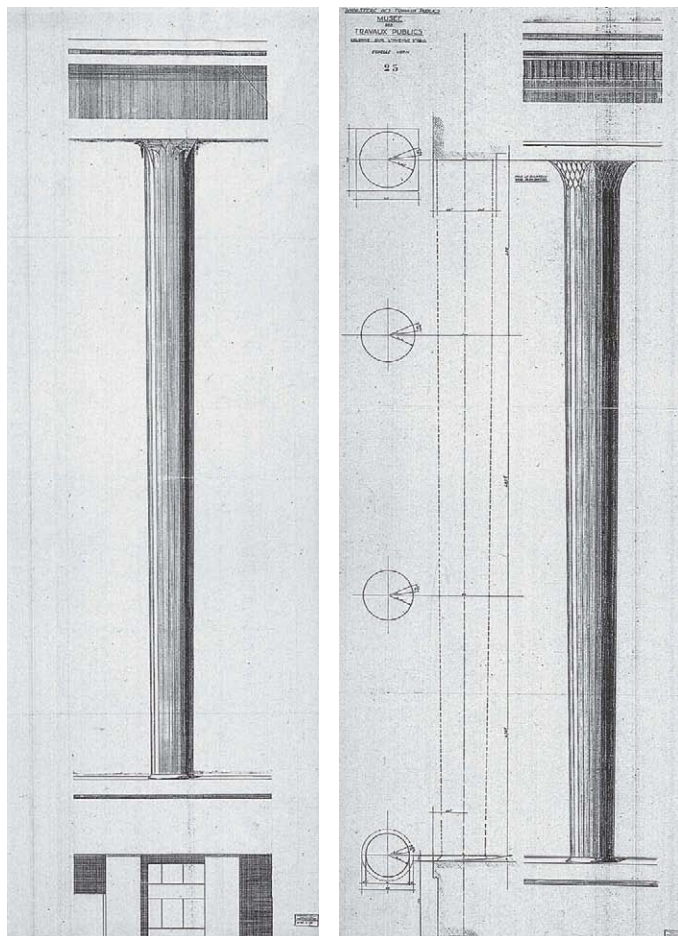
ピロティの構成が最も明快に表現された
例。ガラスの曲面壁とピロティのあいだ
に動線がめぐらされている

原始の小屋「オーダー」

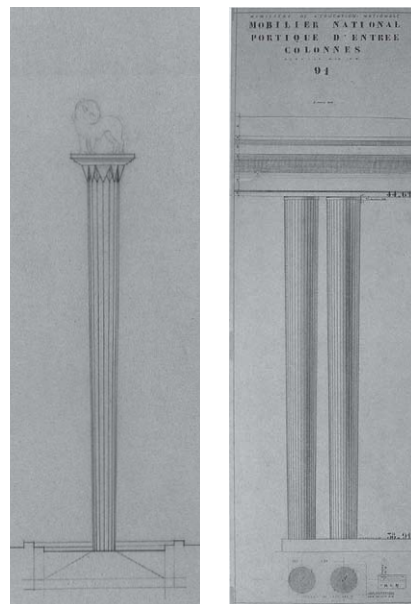
オーギュスト・ペレ

柱梁構法

オーギュスト・ペレは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて鉄筋コンクリート技術を建築に取り入れ、鉄筋コンクリートに特有の表現を生み出していったことで知られています²。今でこそ鉄筋コンクリート構法の代表的なものとなった柱梁構法を、フランソワ・エヌビックのシステムを参考にしながらペレが定着させていくことになります。鉄筋コンクリートによる柱梁構法を私たちは当たり前のものとして認識していますが、この材料と構法との組み合わせは決して素直なものではありません。細い線材を囲むようにして型枠を構築し、その中に水硬性のセメントを流し込んで成形する。セメントが固まれば型枠をはがすプロセスは、材料から素直に導き出されたものとは考えにくいからです。コンクリートという水硬性の材料はむしろ量塊的でモノリシクな使用の方が適しているとも言えるでしょう。当然木造などの線材の組み合わせの方が、柱梁構法との親近性は高いはずですが、しかしそれでも、ペレは柱



オーギュスト・ペレ「土木事業博物館」1946年 柱のスタディ



左:「ライオンのモニュメント」1935年。右:オーギュスト・ペレ「国有動産保管所」1936年

梁構法にこだわった。その結果が、現代にまで強い影響を及ぼしているのです。

ペレが抱いていたのは、柱への強い意識、骨組みこそが建築の本質なのだという確信でした。ヴィオール・ル・デュクやオーギュスト・ショワジエの熱心な読者だったペレは彼らの歴史観を共有し、ギリシャとゴシックを最も優れた建築様式だと考えていました。ギリシャはもちろん列柱の形式が素晴らしく、ゴシックは独自に発展したリヴ・ヴォールトによる架構の仕組みが評価されます。デュクはゴシック

建築を、高度に分節化された部分が有機的なシステムを形成しているのとらえています。リヴが力の伝達を担い、そのあいだに充填されるパネルは純粹に覆いの機能に徹している。後に弟子のポール・アブラムによって力学的に反証されることになるこの理論は、皮肉なことに後の近代建築の発展に大きな役割を果たしていくことになりました。

ペレは、ギリシャとゴシックの統

合にフランス建築の未来を思い描こうとします。石造建築の長い伝統の中で線材による力の伝達と分節化が高度に発達したギリシャとゴシックを頂点と考え、それぞれの技術的な限界を超えることこそが、建築の未来を生み出すことになる。そのために鉄筋コンクリートという素材は使える。そう考えたからこそ彼は、柱梁構法にこだわったのです。鉄筋コンクリート建築の誕生は、単純に新素材がもたらした技術の革新だけではありませんでした。それは、建築の歴史のヘゲモニー闘争の中から生まれてきたものだったのです。

建築の起源

一九二五年の現代工芸美術博覧会で、ペレは二つのパヴィリオンを設計しています。劇場とアルベール・レヴィ出版社館です。この二つのパヴィリオンは、共通する構造形式を持っていました。梁を鉄筋コンクリートで打ち、それを支える柱を縦の木の円柱とするものでした。特にアルベール・レヴィ出版社館で鉄筋コンクリートの梁を支持していたのは、驚くべきことに樹皮を残したままの縦の円柱でした。木がコンクリートを支持する架構は、力学的に見れば合理的ではありません。コンクリートは比重が大きいので、コンクリート柱の上に軽い木の屋根架構が載せられる方が一般的でしょう。ペレはなぜ、この混構造の組み合わせを選択したのでしょうか。

何枚かの歴史的な図像を参照してみましょう。オーダーやゴシック建築の起源を考察した古典主義の



オーギュスト・ペレ「アルベール・レヴィ出版社館」1925年
Fonds Auguste Perret et Perret frères, CNAM/SIAF/CAPa/Archives d'architecture
du XXe siècle/Auguste Perret/UFSE/SAIF/2013.

建築理論書の中に描かれた図像たちです(二〇頁)。最も有名なのはロージェ神父による原始の小屋の図像でしょう。自然に根が張った四本の樹木の上部、枝分かれする部分にエンタブラチュアとペディメントが架け渡された小屋。これがすべての建築の起源だとロージェ神父は主張します。リバー・ド・シャムーストによる一枚は、フランス式オーダーの原型と発展形として二枚の図像が対比的に描き出されています。自然に根を張った数本の樹木の上にドーム屋根が被せられたものが原型であり、その樹木の根が断ち切られて柱基の上に載せられ、樹木を石に置き換えたものが発展形だというわけです。建築は自然の模倣であり、森の樹木による原始の小屋を原型として建築が進化していったのだという思想がここには存在しています。またサー・ジェームズ・ホールは、オーダーの起源の一変異としてゴシック建築の起源を考察しています。ホールによれば、背の高い柳の枝を上方で結びつけると、その組み合わせ方によってさまざまなヴォールト屋根が出来上がるということです。